
Eternal + dream.

春夏秋冬 隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Eternal+dream.

【NZコード】

N5873A

【作者名】

春夏秋冬 隼人

【あらすじ】

突然の引越しで転校した大沢一樹。そこは初めてで知らない土地なのには自分は知らないはずなのに自分のことを知っている人がいた！！

Dream -1「引越し・・そして、」

「ふう～～～、やつとついたな。」

新幹線に揺られて約一時間ちょい、

父の転勤の都合で東京から「」京都に越してきたんだ、
あ、俺の名前は大沢一樹つてつんだ、よろしく。ちなみに歳は17
だ。よろしくな。

「あー、はらへつたー」

今は大体午後2時ちょいですか、

本当なら朝には付いてたんだがな、

家族はみんな深夜バスにのつて来たからもう新しい家に付いてるだ
ろうけど、

おれは車系は酔っちゃってめつきりダメなんだは・・・・・
だから一人だけ車なんです、はい。

さて、家へ向いますか、

「へい、タクシー」

なんてあほな事を叫びつつタクシーを拾つて、いざまだ見ぬ新居へ
向つた。

「つおえー、クソ、やつぱり酔つちまつた・・・」

車はやつぱりめつぽうだめだ、タクシーに乗つていきなり吐きかけた、何とか”吐く”と言う最悪の事態は回避できたが、俺つて二三半規管が本当にしょぼいなー。

ガチャ

「ただいまー、つてかこの家来るの始めてだけビネ、」

「おお、やつと来たか、遅かつたな一樹。」

「ちょっとタクシーで酔つちゃつてゆつくり走つてもらつてたから、

「お前、車はめつぽうだめだなあ、」

「ところでオヤジ、にーさんやねーちゃんは?」

「2階で自分の部屋でも決めているだろ、それよりも一樹、話が・・・

・

「悪いけど後にしてくれない、俺も自分の部屋見てくる。」

そういうと俺はオヤジが後ろで何か言つているにもかかわらず2階への階段を登つた、

ちなみにさつきのが俺のオヤジの大沢哲也、それに俺には兄と姉がいる。

兄は大沢葵つて言つんだ、”あおい”つて女みたいな名前してゐるけど一応俺の兄だ、

今年でちょうど20の兄は今は現役の大学生だ、そして姉は大沢日衣菜つて言つて俺の一つ上だ、

引っ越し前は違う学校に通つていたがこつちに転校してきてからは

同じ高校になるらしい、

なんかいやだよな、姉弟が同じ学校にいるのも。

上にあがると「ーちゃんとねーさんが何処にいるのかはすぐにわかった。

「ーの部屋は俺のだ、お前は出でけ。」

「何でよ、普通、一番大きい部屋は年下に譲るものでしょう！..」

「じゃあ、日衣菜は一樹にゆずれるのかよ、ー」

「それとこれとでは話は別でしょ！、大体一樹ははーちゃんと違つて
がめつくれないから、

快く譲つてくれるはずです。」

「はいはい、そうですか。でも、俺はがめついから譲らないー。」

「そんなんだから彼女の一人もできないんですよ。」

「つるさい！、それこそ関係ない話だろ！」

「ああ、またやつてるよこの一人・・・・・・

なにかと色々な事で喧嘩するよなあー

仲が良いのか、悪いのか、どっちだらうな、
まあ、俺には関係ないか・・・・・・

「あのー、お一方？ ジャンケンなどで決めてはいかがですか？」

「「ああー。」「

怖！..怖！..怖！..怖！..

カナリ怖！！

「あのー、2人ともめっちゃ顔怖いんですけど・・・・・・。」

「ああ、一樹が、遅かったなやつぱり酔つたんだろ。」

「ああ、でももう大丈夫。」

「あんた、それなんとかなんないの？致命的よ、」

「しょうがないだろ、酔わないねーさんには関係ないよ。」

「そうね、でも関係ないことはないわ。だから明日から特訓しますようか、にーさん。」

「おお、それいい考えだ口衣菜。どうだ一樹？って何処へ行つた。」

ヤバイ、ヤバイ。

ねーさんの考え方くことで俺ことって有益なことなんて一つもない。それにいつもなら止めるにーさんが乗るんだもん、絶対やばいよ。他の部屋でもみよ~と。

そして新居を探索し少し口が地平線に沈む頃、俺はあることに気づく

「な~、にーさん。」

「ん？なんだ。」

「俺の荷物なくない？」

結局、じょんけんで勝つたのか知らんがさつきの部屋で荷物の整理をしていたにーさんが切れが悪そつて言ひ返してくる。

「そーか？ああ、アレだ口衣菜のところにでもまだれてるんじゃないの k r d f t g y n u j t k o i」

「にーさん、呂律が回つてないよ。」

「そ、そんなことないぞ、口衣菜のところに行つてこよ、やつとやいだぜ。」

* * * * *

「ねえ、ねーさん。」

「なに？何が用？それと部屋に入るとさすノック必須よーー前から言つてるでしょ。」

「ああ、ごめん急用で忘れてた、で俺の荷物知らない？一階の何処探してもないんだけど？」

「え、あー、あれ？荷物ないんだー、此処にはないわよ、さつとこーさんの所じゃない？」

「先に」ーさんのところに行つてきました。」

「あ～そうなの？、じゃあ下じゃない？父さんに聞いてみれば？」

「わかったよ、そうしてみる。」

そう言つてねーさんの部屋を出ると先ほど上がつて来た階段を下り始めた。

Dream - 2 「こわなつすめる顔」

階段を降りて下の階に行くとオヤジも下で荷物の整理をして居る所だった。

「ねー、オヤジ？」

「なんだ？一樹」

「俺の荷物知らない？家中捲しまくったんだけど何処にも見つからなかつたんだけど？」

「ああ、おまえの荷物ならそこにあるだい。」

そこには確かにダンボールはあった・・・・。
でもそこにはどう考へても一箱しかない。

俺が荷造りしたときは・・・13個、いや、とにかく10個以上はあつたはずだ。

「あれ、これだけ？」

「そうだぞ、明日から行く学校の制服に鞄など、学業道具だ、」

「残りは？机とか漫画とかゲームとかゲームとかゲームとかは？」

「ああ、それをさつき話そうとしてたのにお前が上に行くから話せなくなつたんじやないか」

「で、残りの荷物は、」

「おお、それだよ。お前、お爺ちゃんがアパート経営してゐるの知つてるだろ？」

「ああ、ま、まさか・・・」

「ああ、そのままかだ。お爺さんの所に送つておいた。」

「何でだよ！どうしてそつなるかなあ。せめて当事者には事前に理由くらべ言え！」

「まあ、まあ、落ち着け。今度からは言つぱりとくるから、」

「今度があるのかよ！で、理由は？どうしてこんな事を？」

「それはだなあ、お爺さん、すなわち私の父だが、なぜだかな急に世話係がほしこうて言つてきたんだ、まああお爺ちゃんも年だからそういう介護役がほしいのは解るが赤の他人に任せたくないらしく、だから身内からお前が選択された。」

「それはわかるけど、だからってこんな急・・・」

「心配するな、わが息子よ。お爺ちゃんが給料代わりにアパートの空き部屋をタダで貸してくれるらしいぞ、そうなれば念願の一人暮らしができるぞお～、どうだあ～？いい条件だろ？」

「た、確かに前から一人暮らしあしてみたいって行つてたけどよ、でもこんな急には・・・」

「「ちょ～と待つた～」「

俺の言葉を遮つて現れたにーさんとねーさんは開口一番オヤジにむかつて異論をとなえ始めた、

「俺はそれには反対だあ～」

「もちろん、私も！」

「おまえたち、いまさら反対つて言つても仕方ないだろ、」

「じゃあ、一樹が消えたら誰がご飯作るんですか？」

「そうだよ、俺たち作れないぞ～」

「にーさんそこ威張るところじゃないぜ」

「そんなもん、父さんが作るじゃないか、」

「「それはダメだ！（よー）」「

二人がキツク反対するのがよくわかる。

昔、父さんの作った料理を食べたことは在るけど、ものすごく不味い。

というか不味いの前にあれは料理と呼べるのだろうか？

幼い頃の自分は純真無垢で疑うことを見らずそれが食べ物だと思い込んでいた。

だが今思うとあれは形からして料理ではなかつたんじゃないかと思う。

そして今までの会話から解るよつにこの家には母親というものがいな、俺の小さい頃に死んでしまつたので残つてゐる記憶は少ない

だからこの家の食事はもちろん家事全般は俺がこなしていた、

「冗談だよ。私も、もう作るつもりはない。」

「じゃあ、ご飯はどうなるんですか、とーさん」

「そうだよ、それに一樹の病気は？起こつたらどうするんだよ、」「俺のことなら心配要らないよ、にーさん。この頃は落ち着いてきたし別に大丈夫。」

「落ち着いたとかそういう問題じゃなくてだな一樹・・・・・

「本当に大丈夫だつて、」

「ほら葵も一樹が大丈夫つていつてるんだから信じてやりなさい」

それに追記しておくと俺は二重人格なんだ。

小さい頃に母親をなくしたそのショックか知らないけど俺は母さんをなくしてすぐ二重人格になつたらしい。

そのため俺にはもうひとつの人格が在り、その人格は俺の小さい頃のまま成長が止まつちゃつてるらしい。

俺が母さんをなくしたのが5～6歳ごろだから俺のもうひとつの人格はその年ぐらいだろう。

俺には5～6歳以前の記憶の大半がないすべてもう一人の俺のほうに流れてしまつてゐるらしい。

そのため俺は小学生以前のことは何も覚えていない。

俺は実際にその人格を見たことが無い（見れるわけ無いよね。）うえに変わっている間の記憶が無いためどのよつな子なのかは知りようが無い。

でも最近は人格が変わるたゞぶりも無く、もつまつたく問題ないとつても過言ではない。

「わかったよ、でもメシはびりするんだ？掃除や洗濯は俺達がやつてもいいけどメシは無理だぞ、」

「こーわん、掃除や洗濯できるんなら一樹を手伝つてあげたゞりなんですか？」

「そうだよ、ねーわんの言つ通りじょん

「そこは気にするな、本題からそれるぞ。で、父さんびりなんだ？」「せつですねー」飯は出前でもしてればいいでしょ。

「マジかよ（なの）……」「

「まあ、そのうち葵たちに作ってもらおんなつになつてもうりますけどそれまでなら出前でいいんじゃないでしょうか？」

「まじかよー、最高ジャン

「あー一樹？おねーちゃん達全然心配してないから安心して行ってきて~。」

「やうだぞ、一樹。一生懸命世話をこ

この兄妹はどれだけ変わり身がはやいんだよ、メシが外食が出前だつて決まつた瞬間態度360度変えやがつて、どんな神経してるんだ？

「一樹へ、お兄ちゃんから忠告へ。」

「なんだよ、」

「360度も態度を変えたら一周してきちゃうだ~」

「ぐわあは、しまつた・・・・。あれ?でも声に出して言つたつけ
?」

「一樹の考へてる」となんてわかつずかなんだよ。」

「そうよ。一樹は馬鹿なんだから。」

「あんたらカナリ酷いな・・・」

「そりか?にーちゃんはそんなこと無こと黙りついだ。」

「そうよ、私達なんて序の口よ。」

「一樹がナイーブ過ぎるだけだな。」

「一樹?。そんなことよりお腹減ったから『飯早くつくつ』

「ねーさんも少しば手伝つて」

「え~めんどくさい。一ーさんにバトンパスです。」

「俺も父さんにパス。」

「一樹にバスだ。よろしくな」

「「よろしく〜」」

俺はテレビを見ながらくつろぐ我家族に心の中で愚痴をこぼしつつ
俺は晩飯を作り始めた・・・・

「はあ～疲れた。」

そうつぶやいて寝返りをしたいところだがそもそもいかない、これはソファーなのだ。

もちろん自分のベッドは今はその他の荷物といっしょにお爺さんの家に在るだらう。そのため今日はこのソファーで寝るしかないのだ。

「明日から新しい学校かあ～」

そんなことをつぶやき明日の学校がどんな所なのか勝手な想像を膨らます。

学校の外観は今日この家にくる途中のタクシーの窓からみえた。外見は一瞬だけだったがきれいな学校に見えた、行くには確か電車で3駅だな、

頭の中で学校への行き方を復唱して俺は深い眠りに落ちた・・・・。

* * * * *

朝・・・・・・、

眼を閉じているのに明るい日差しが見えた、

横ではうるさいく鳴る携帯のアラームをして騒ぐねーさん、眼をあけ体を起こし携帯のアラームを止め辺りの状態を確認する。

時間	・	・	・	・	まだ十分ある、
用意	・	・	・	・	昨日のしきでした、
問題点	・	・	・	・	ねーさん、

状況確認が終わると俺は顔を洗いに洗面所に向かう、

「もー、ちょっとじこにあるのよー、「

相変わらず何かを探すねーさん、

正直もうそろそろ朝から周りをばたばたされるのがうつとうしくなつてきたので声をかける。

「ねーさん、何に探してるの?」

「ん~、あれと、あれと~あれもだし・・・あつ、そろそろあれ探さなきや!」

「ねーさん、アレばつかじや何を探してるのかぜんぜん部外者には理解できぬいよ~」

「そう?一樹ならわかつてくれると思つたのに?」

「期待に添えなくてすみません。で、なんなの?」

「ん~、学校のセットが入った箱)。いっぱい箱在ってどれかわかんないのよ~」

ご愁傷様。

探すのを手伝つてあげたいところだけどあれだけ余裕だつた時間が今ではもうすぐ家をでるべき時間をさす。

俺の箱はひとつしかないから何処に何があるかなんて一目でわかる。

「ねーさん？」

「なに？あつた？」

「もうそろそろ家を出るべき時間だよ、って教えといひと思つて。」「えっ、マジ！うわあ本当だ。」こんなことならにーさんみたいに昨日のうちに整理終えときや良かった～

「やつ言つて自業自得つていうんんだね、じゃいつきま～す。」「ひへ、探すの手伝え～。この薄情もの～、「

後ろでねーさんが騒ぐのも軽くあしらひ玄関のドアを閉めて1日だけだつた新居を眺める。

今日からこの家には帰らない、引っ越ししたのだがこの家にではない。今日からお爺さんの家に帰ることになる。

「こつてきま～

俺は家に向かつてひづりと駅への道を歩き出した。

* * * * *

電車で3駅、俺が通うことになるこの高校はそんな距離に在る。乗るときには自分でくらいなものだつたこの制服を着ている人も一駅、また一駅と近づくにつれて数を増し降りる頃には回りは同じ高校の制服を着た人の波に飲まれていた。

そのなかには自転車で登校するもの、走るヤツなどたくさん居る。この中に同じクラスになるヤツは居るのかな？などと考えながら学校への足を一步、また一步と進める。

雲が綺麗だ。

新しい生活を踏み出すことは最高の日だ、そんなこんだで見えてきた校門をぐぐると昨日見た通りの綺麗な校舎が見えてきた。

校舎に入ると案内板に書いてある職員室に向かい歩き出す。
職員室の手前まで来るとなにやら何処かで聞いた事があるような声
が聞こえてきた。

まさか・・・・。

ヤツは俺より後に家を出たはずだ。

次の電車に乗れたとしても先にいついた電車を追い越せるわけがない。
いや、まじめ。

・・・・・・・・。

・・・・自転車か！

でもそんな体力がヤツにあるとはおもえん。

よつて自分の思い過ごしだらうと結論づけ職員室のドアを開けると・
・・・・。

「一樹へ。おそかつたねへ。」

中からは待つてましたとばかりにねーさんが声をかけてきた。
俺がその場に驚き呆れているような顔で立っていると一人の若い男
がこちらに近づいてきた。

「君が弟の大沢一樹君だね？僕は君の担任になる田島だよ。ようし
くね。」

「あ、はい。よろしくお願ひします。」

声をかけてきた田島先生とやうせ

年齢 27?

外見 体育会系？

性格 でもしゃべり方はゆっくり（一樹調べ）

ところう風な感じで外見と性格がこれほどミスマッチな人もそうめつたにお田にはかかれないとthoughtたりした一樹であった。

そういうしている内に職員室での諸事情の説明が終わってねーさんと別れて田島先生の後を歩いている。

「はい、ついたよこが今日から君のクラスの2年3組だ。」「はい。」

わながらなんとも事務的な返事だ。

「みんないい人だから心配する事はないよ。じゃあ入つて。」

そう言わされて田島先生の後について入った教室には大体生徒が30人弱、男女比率は13対17くらいで女子のほうが多い。

「はい、みんな聞いてくれよ、転校生でーす。じゃ、なんか喋つて。みんな、質問は聞いてからだぞー。」

そう言つと田島先生は黒板に俺の名前を書き出す。

「はじめまして、今日からこのクラスになりました大沢一樹と言います。当然だけどまだこの学校の事やこの近くの地理についてなんて全然わからないのでなにかと聞くかもしれませんがあくまでもよろしくお願ひします。」

「はい、有り難う大沢君。つて事だからお前らわかつたなー」

「はい！質問！」

「おれも、いいですか？」

「えつなに？ホームルームの時間終わりそだしな～、一つだけだぞ、いいかい？大沢君」

「あつはい、いいですよ。」

急に話を振られて驚く俺。

「じゃあ～代表で朝永、」

「へ～い、じゃあ質問お。s・・・・・」

「ハイ残念時間切れ、ハイわっせと座る。」

そう言われて朝永と言われた生徒はキビキビト席に着く。
それについてこの先生何がしたいんだ？

「じゃあ大沢君はあの席にでも座つといて、たぶん席替えすると思うから。」

「あつ、はい。」

それだけ告げると先生はさつさと教室から出て行つた。

Dream -4 「朝の一幕」

言われた席につくとそこはやわらか田島先生に朝永と呼ばれた生徒の後ろだつた。

「俺は朝永だ、朝永和真ヨロシクな、」

そう言つと左手を俺のまづに出してくる。
それを握り返し握手をして、

「ハヤシヤヨロシク。」

そう言い返した。

「じゃあ転校生、本題に入つていいか?」

「なんだよいきなり、それに転校生って呼ぶのはやめてくれ。それ以外だつたら何でもいいから。」

「〇～K～、わかつた。じゃあ下の名前で呼ぶ。お前も好きに読んでくれていいぞ。」

「わかつた。じゃあ悲劇君。」

「なんでだよ……」

「だめか?」

「何処の世界の人間が初対面のヤツに”悲劇君”って名前付けるんだよ!!」

「なんで? アンタさつきの質問の時と言いなんか悲劇だなーとおもつて、」

「ああ~、さつきの質問は悲劇だな、まつタジやんはあんな調子の人だから覚えときな。」

「”タジやん”?」

「ああ、わいつの田嶋先生の」と随から話タジやんつて呼ばれてるんだ、」

「へえ～、覚えとくよ悲劇君」

「だから悲劇君って呼ぶ名つての……」

「じゃあズッキーで、」

「あんた人のあだ名考えるの趣味か?」

「まあ適度に。で、わいつなんか言おつとしたしてなかつた?」

「ああ、そつそう。わいつの質問だな?」

「せいつの質問に答えないほうがいいわよ、転校生。」

ズッキー（俺の中のあだ名に決定!）との喋りを中断された声の主のほうを向くとそこには一人の女の子が立っていた。その子は綺麗な黒髪を下ろしていくこちらを正しくはズッキーを威圧的に見ていた。

「なんだよ、蒼依。俺が今一樹と喋つてんだ、邪魔すんなよ。」

なんと呼んでもいいつて言つたけどこきなり名前はちょっと抵抗が・

と言つ俺の叫びも悲痛に会話は続く。

「アンタまた色々と聞き出さうとしてたんでしょ?」

「あつ、ばれてた?」

「当たり前よ!! 何年アンタの監督役務め上げてきたと思つてんのよーーー」

「なあ、ズッキー?」この人は誰だ?」

「ああ、コイツは・・・・・」

「あなたに言われなくとも自分で言います。私は朝倉蒼依ヨロシク転校生。」

「だから、その転校生ってやめて、」

「ああ、イヤなの？私一回転校生を転校生って呼んでみたかったんだけど？」

「なあズッキーーちゃんの人ちょっとアレですか？」

「ああ、おかしいな。ロイツとは長い付き合いだが初めてきずいた。お前のおかげだ礼を言ひ。」

「いやいや、気にするな。友情への第一歩って事で、」

「いいこと言いますな、あんさん」

「あんた達そこ一人で何こそこそやつてんの？」

「いえ、お気になさらず」「..」

「まあいいわ。とにかく大沢君？だっけ、和真に何質問されても答えないことね、」

「なんで？」

「ロイツはこここりでは”パパラツチ”の異名を持つ男よ。」

「パパラツチ？」

「ロイツに話なんてしたら次の日にはある事ない事が噂になつて町中を駆け回るわよ、」

「ズッキーーってそんな嫌なやつなの？」

「一部のものが俺の情報力を疎んでそのような噂を流したようだが、初対面のヤツにズッキーーって言つあだ名をつけるヤツよりかはひどくないぞ！！」

「ああ、じゃあ普通に呼ぶよ。」

「じゃあ、授業始まるから席戻るけどとにかく和真に何質問されても答えないことよ」

「わかつたよ、えへ、名前なんだっけ？」

「一樹、お前物覚え悪いな、」

「言ひな、」

「ああ～、もう、ちやんと覚えなさいよ朝倉蒼依です。」

「ああ～、おーけーおーけー完全に覚えた。にーさんと名前が一緒だ。」

「 そりなんだ。」

そう言うと朝倉蒼依は自分の席に戻つていった。

それにもう一さんと同じ名前の女の子がいるとはなあ
前からにーさんの名前女っぽいって思つてたけど何かほんとに名前
付いてる人がいるとつくづく実感するなあ
しかし”葵”と”蒼依”か、字似てるかな?

Dream -5 「昼の一幕」

キーンゴーンカーンゴーン
ベルがなる、授業がおわり昼休みがくる。

腹が減つた、

そりやそうか昼だもんな、

そういうえばこの学校には食堂があるはずだ！

財布を確認・・・・・

・・・・・

・中身は少ないが昼ご飯という出費には耐えられそうだな、
そつとなれば善は急げだ！

「なあ、ズッキッてい！違うつ！違うつ！なあ和真じいじて食堂あるん
だろ？」

「まあ、あるけど？一樹は弁当じゃないのか？」

「ああ、普段はわからんねえけど今日は朝、いろいろあつたからな。
だから、つれてけ、たのむ！」

「えー、俺弁当なのにー」

「そこをまげてたのみますつー。」

「ちえ、しょーがねーなあ

「さすが、そこになくつちやー！」

そう言つと俺は立ち上がり和真のあとについて歩く、

食堂までの道程で俺はついでとかいつて和真に学校を案内しても
らつた。

和真の話によるとこの学校は校舎が5棟在りすべての校舎はわたり

廊下でつながつていて

形は漢数字の「三」の両端に「二」本縦線を引くと出来る形に近く具体的には「一三一」な感じ。

校舎は漢数字の部分は上から北棟、中央棟、南等。あと両端は言わなくてもわかるだろ？が西棟と東棟。

そして食堂は西棟にある。

「ほい、そしてここが食堂。」

「ありがとさん、へー結構綺麗なんだな。」

「この食堂が完成したのがまだ半年くらい前だからな。」

「へー、そうなんだ。で、どうすんの？」

「まず、そこで食券を買つ、」

和真が食券の販売機を指で示す。

「そして、あそこで渡す。」

そして、厨房みたいなカウンターみたいな場所を指す。

「そして食う。」

そして、席の群を指す。

「的確な指示をありがと。」

「きにすんな、これも何かの縁だ、」

「そうですか？」「

そう言つと俺は自販機に向つ。

・・・・ん〜〜〜。

迷うな・・・・・

カレーにすべきかラーメンか?
迷う、

他に食いたいものはあるのだが俺の財布が以外にも少なくこの一つ
以外に耐えられそうにない。

「ちひ、 じょうがねー」

やつづぶやくと俺はラーメンのボタンを押した。

「かつてきたか?」

「ああ、 待たせたな。」

ラーメンを持つて帰ってきた俺を先に席に座っていた和真が待受け
る。
和真はそこで持参の弁当を広げてくれる。

「「「じやあ、 いただきまーす。」」

叫んでお箸を口に運ぼうとしたその刹那。

「ひとまつた~~~~~。」

「なんだあ?」

奇怪な声を出す和真。

「ねーせんー? んで「んなど」「ひ」と?..」

先ほどの声の方向を向くといふのはなぜか? さんがそれあの・・・・・
え~、・・・
誰だっけ?

あつそうそう、朝倉蒼依ともう一人誰かの合計三人が立っていた。

「あの人お前のお姉さんなの？」

奇怪な声でたずねる和真。

「ああ、そうだよ。でもねーさん何で朝倉さんと・・その他一名は誰？」

俺はそういうて朝倉さんの隣にいるすぐ澄んだ綺麗な青い目で髪の毛をポニーテールにくくつた女の子を指差した。

「ええ！・、覚えてないの！？」

そういうつた俺に指差していた少女が叫んだ、

「私よ、私。蒼井優華、覚えてないの？」

ん~、蒼井優華・・・・。

どこかで聞いたような、思い出せん。

えーっと、落ち着け、良く思い出せん・・・・・

蒼井優華・・・

蒼井優華・・

蒼井優華・

「あつー！」
「思い出したー！？」

蒼井優華が希望の眼差しをこちらに向けてくる、が・・・・

「いや、まつたく

「……紛らわしい事言わなこでよーー。」

「べうへっ・・・・・

俺が言葉を発してから少しの間を空けて蒼井優華が叫ぶ、
だが俺はその言葉を聞き取ることは出来なかつた。

気づいたときには時、すでに遅し。

蒼井優華の回し蹴りが俺の腹にクリティカルヒットーー！

俺のＨＰは瞬間的になくなり地面に倒れこむ。

俺が最後に聞いた言葉はすでに弁当を食い終わつた和真の、

「冷めると困るからラーメン貰つとくな

「こののとおな一言だつた。

Dream -6 「下校時の一幕」

「ん、つてえ~」

目を覚ます。

どうやらここには独特的の匂いからみて保健室のようだ、俺はどうしてここに・・・・。
ああそりだ、蒼井優華に殴られて・・いや回し蹴りを喰らって・・。

・・・(ノヽヽ) ヒイイイイ

そのあとは思い出したくもねえ・・・。悪夢だ。

「今何時だろ?」

何時間ぐらい気を失つてたのか気になりふと疑問に思い時計を見ると、

「5時か、つてい。もう五時かよーーー。」

外を見るともう秋だけに日は地平線の下にもつ入り始めていた。

「帰るか、鞄取りに行かなきゃ。」

ガラツ

俺が立ち上がりとしたそのとき保健室のドアが開きねーさんと蒼井優華が入ってきた。

「一樹、大丈夫！？」

入つてくるなり蒼井優華が俺の腹にダイレクトアタックで飛びついでくる。

「ぐへっ……」

もちらりベットの上だつた俺はよけるすべもなく……。

悪夢再び……。

そんな感じだつた。

「おい、お前。誰か知らんが急に飛びつくな……死ぬかと思つたぞ！」

「ごめん、一樹。つい心配で。」

「てか、あんたのせいで午後は氣を失つて過ごしたぞ、いつたいどんな蹴りだよ！！」

「回し蹴り。」

「つたあ～。聞いてね～よ……つーか初対面にいきなり蹴るやつがいるか！」

「ここに、つてちょっと…私と一樹は初対面じゃないわよ…！」

「はあ～？何言つてんだよ、俺は昨日越して來たばっかりだぜ？」

「昔この町に住んでたでしょ？」

「住んでねーよ…じーちゃんの家に遊びに來たときはあるけどアソタみたいなヤツにあつた覚えはね～よ…！」

「嘘…！おねーちゃんは私の事憶えてたわよ…！」

「お前がおおねーちゃん言うな…！」

「いいじゃない、昔から呼んでるじゃない」

「そつのねーさん？」

「うん」

「ほらねーさんも知らないっていってえええええええ~~~~~」

「ほり、さすがはおねーちゃん」

「当たり前よ 私が優華ちゃんの事忘れるわけないじゃない」

「ねーさん、」

「なに?」

「知ってるんですか?その子」

「ああ~、一樹は覚えてないんだつけ?」

「はい、知りません。」

「//一樹なら知ってるかな?」

「ここで予備知識だが//一樹とはねーさんが俺のもつ一人の人格につけた名前だ。

「//一樹って事は俺が小さい頃ですか?」

「誰?//一樹って?」

「ああ、優華ちゃんは知らないのね」

「なにがです?」

「一樹ね、実は二重人格なのよ、」

「へつ?」

「なあ~んだ、覚えてないんだつたらちやんと言つてくれたら良かつたじやない」

帰り道で蒼井優華が言つ。

あのあとフリーズした蒼井優華をねーさんと一緒に一人で復活させねーさんが一通り説明した。

説明が終わるとねーさんは先に自転車で帰つて行つた。

”ちつ、朝はあの自転車に負けたのか”

つと思いつつ帰る道の方向が蒼井優華と同じなので仕方なく一緒に帰つている。

「言つてくれたらつてお前毎間俺が何か聞く暇もなく蹴つただろ」「あれ? そうだっけ?」
「うん」
「気にしないで、終わつたことは水に流しましょ」
「お前が言えることかよ、」
「あはははは、気にしない、気にしない」
「ところでお前は俺をなんでしつてるんだ?」
「も~、お前つて言わないでよ。昔みたいに優華でいいよ」
「昔みたいにつて昔が覚えてないのにそんなん呼べるわけないだろ!」
「も~シャイだな~、一樹は」
「そつ、そんなことよりなんなんだよお前は?」
「ほんとに忘れたの? あんなに深い関係だったのに・・・」「だから~、その意味ありげな笑いはやめろ!~!」「あははは、からかいがいがあるな~一樹。昔と変わらないよ」「その昔のことを話してほしいのですが?」「知りたい?」「知りたい」
「昔ね、一樹は私の家の隣に住んでたの、昔は毎日のようにおねーちゃんと一緒に樹たちと遊んでましたね~」

「へ～、そんな過去があつたのか・・・」

「そうだよ、ダカラ私と一樹は幼馴染で恋人よ、」

「いや、ちょい待て、幼馴染はわかるけど何故に恋人？」

「ええ！..覚えてないの？あんなに情熱的な告白をしといて忘れたの？それにあんな事も・・・」

自分で言つといて顔を赤くする蒼井優華。

一体俺の過去に何が？

「いや、だから覚えてないんだって」

「浮氣！..その歳で！..女でもいたの？」

「いや、そんなのい訳・・・・・・・・」

「一樹のバカヤロ～～」

俺の言葉が途中で詰まる。

そしてまたまた回し蹴り。

だがある程度予想できた範囲なので軽くよける。

そうすると空を切つた蒼井優華のキックは外れ遠心力でそのままこけてしまった。

「いつた～い、何であたつてくれないのよ！..」

「馬鹿かお前、俺が痛いじやん。」

「ばかつてゆーな、それにお前つて呼ばないで

「じゃあなんと呼べど？」

「昔みたいに”優華”って呼んでよ～

「ばつ、馬鹿やろつ！..初対面の人をいきなり下の名前で呼ぶとかそんな恥ずかしいことできるかよ！..」

「も～シャイだな～、一樹は」

「シャイって言うな！」

「じゃあ呼べるの？」

「ゆ、ゆ、優華」

「良く出来ました。これからも毎日その調子でね」

「恥ずかしくて死にそうだよ。つてかお前何処まで着いてくれの？」

「何処までつて、私帰り道いひうなのよ」

「へえ～、そうなんだ」

「何？一樹は私の家知りたいの？」

「いや別に、だからその含み笑いはやめて、」

「私は知りたいな～」

「何を？」

「一樹の家に決まってるじゃない。おねーちゃんと方向違つかった
みたいだけど別々に住んでるの？」

「ああ、まあな。じーちゃんとい、」

「一人暮らし？」

「まあ、一応は」

「ナイス！！」

「なんかいった？」

「何もないよ、気にしない。気にしない。つておじこさんとのこと
住むの？」

「うん、アパートの部屋一個借りてさ、」

「へ～、つておじこさんのとこアパートつて言つよつはマンション
だよアレは」

「マジ！…おれアパートつて聞いてたからボロイとこだと思つてた
いや、結構綺麗だよ、つ言うか見えてるし、」

「えつ、どれ？」

「あれ

「アレじゅわわかんね～よ

「ほら、あそこの田の前のとこ」

「あれか

「そうあれ

「へ～、立派になつて」

「昔に比べりや立派だね～」

蒼井優華の指す道の先にあるマンションは6階建てで一回は何かのお店みたいな感じだつた。

昔はあそこに二階建てのぼうアパートがけふじと建つてたと黙つけど今はそんなかけらは微塵もない。

確かにアパートと言うよりはマンションだ、

「あの一階の店はなんだ?」

「あれ、知らないの?」

「うん、知らない。」

「おじいさんが一階で喫茶店やつてるのよ、

「なにやってんだよじーちゃん

「いいじやない、繁盛してるんだし」

「やうなの?」

「うん、結構おこしへて評判なの

「へ～、」

「私も好きだよ、おじいさんの特製コーヒー

「へーじやあ俺も淹れてもりおつひとつ、」

「じゃあ、早く行こ!!」

そう言つと蒼井優華は俺の手を取つて走り出した・・・・。

DreamEND???

「あつ、一樹。いつの忘れたけど心の中じや私の事フルネームで呼んでるでしょ

「えつ、何で知ってるの」

「そつ、そこは気にしない……とあります優華って呼んでつていつ

たでしょ」

「ええ 心の中でもかよ、」

「そうよ！…わかった？」

「わかつたよ、」

Dream -7 「家の一幕」

カラソ

パーン

「うおあい！」

「「「大沢一樹くん引っ越しあとでとーーー」」

蒼井つてい、じゃなかつた。優華が勢い良くてドアを開けるとそこにはクラッカーを持ったねーさんと我が爺こと大沢慎一と知らない人が数名、

「驚いた? 一樹?」

ねーさんが尋ねてくる、

つて待てよ。ねーさんは学校を出て逆方向にむかつたはずだしここまではほぼ一步を道だし先回りできるはずがない、朝に続きまたしても・・・・。

あの自転車のスペックが気になる・・・・。

「あら、驚きすぎて声も出ない?」

知らない人Aが喋りかけてくる。
ええ、そりやーある意味ね、
俺は心の中でつぶやいた。

「驚いてもらえりや、用意したかいがあるつてもんだな、」

「この人はとりあえず知らない人Bだな。

「えっと、失礼ですがどちら様で？」

「一樹、」*この人はね*・・・・・

「いいよ、優華ちゃん自分で言つよ、僕は町田 智也、歳は20で大学生だよ。ちなみに部屋は403だよ、ヨロシクな。」

「それと私は永井 美空303号室に住んでます。ちなみに智也とは恋人ど～しで～す。」

知らない人Aが自己紹介をして町田さんに飛びついでいった。

町田さんは急な飛びつきにもかかわらず持っていた飲み物をこぼすことなく永井さんを受け止めた。

「そして私は305号室に住んでいる菊池 怜奈、よろしく。」

新出の知らない人Cの自己紹介が終わる。

「そして私が601号室に住んでいる蒼井 優華で～す。改めてヨロシクね、一樹。」

優華が俺の前に出て自己紹介をする。

「一樹、ほら突つ立つてないでお前も自己紹介ぐらいしなさい。」

じーちゃんがせかす。

「え～っと、今度ここにお世話になることになりました大沢 一樹です。歳は17歳今現役の高校生です。始めての一人暮らしで右も左もわかりませんが皆さん、なにとぞご指導ください。」

「「「「よろしく～。」「」「」」

「ところで俺の部屋は何処なわけ、じーちゃん？」

「どうって言われても・・空き部屋だらけだから何処でもいいんじやがな、」

「じゃあ俺と同じ階の部屋なんてどうだ？」俺の階以外にないからさみしいんだよ、」

「あれ、智也、いい歳して怖がってるの〜?」「ちつ、違うっての、黙つてろよ美空。」

「あれ、焦り具合がまたあやしくなつての、あつ・・。」

「じゃあさ、私と一緒に部屋に住まない?」

「一樹、苗字禁止！！」

「あへ、すまん。こひそんな」とじやなくひへへへへ

「冷蔵庫へん。今もうひぬじゅあつませへん。」

「ね」

「それですよ。

「言つてくれたわね、優華！！」

「ダメよ、優華ちゃん怜奈は彼氏いないんだから~」

一 美空！！優華！！死にたい？」

笑顔で拳を振るわす菊池さん・・・・・・・

「じーちゃん、皆、愉快な人だね？」

一 疑問系じやな、一樹、

「まあ、彩さんが帰つてきたりもつとに生きやかにならねー」

「彩さん？つてだれなんですか？町田さん、」

「あれ、ねーさん、まだいたんですか？」

「いたとは失礼ね！－誰も喋りかけてこないし、作者も喋らせないし読者も忘れてる頃だろうから、作者ぶつ飛ばして出てきちゃった、」

「一樹君、キミのお姉さんは何か”作者”とかなんとか不思議なことを言う人だね。」

「あつ、町田さんもわかります？言葉だけじゃなく言動も不審なんべへつ」

「いて～、ねーさん。いきなり右フックはきつこです。俺って今日で殴られるの何回目かな？」

「だつ、大丈夫か？一樹君？」

「ごつ、ご心配有り難うござイマス。町田さん」

「そうか、それならいいんだけど、それと俺のことば下で呼んでくれるかな、苗字で呼ばれると何かこうじょばいんだよ、」

「あつ、わかりました。じゃあこれからアロシクおねがいします。

智也さん

「ううう、そう呼んでくれ、」

そんなこんだいろいろなことがあったけど一応俺の歓迎会っぽいものは結構遅くまで続いた。

部屋の件は優華がブチブチ文句を言っていたが流石に一緒に住めないので同じ階の隣に住むつて言つことで優華を納得させた。

そんなことで俺は今自分の部屋の602号室に居る。

このマンションは6階だけ構造が違つて他の階は5部屋ずつあるのにこの階は2部屋しかない。

つてことはこの階には優華と実質2人だけかよ！－！

ハメやがったな、あいつ。

それに周りの人も誰も教えてくれんとは、皆、絶対知つてたぞ・・・。

さて荷物の整理でもしましちゃうかねっと。

ぴんぽん

がちゃ

「あれ〜、鍵あいてるよ。無用心だな〜一樹は。」

「おい、勝手に入つてくるか？普通。」

「まあ、私にとつてはそのほうが都合いいけどね。つて一樹まだ荷物片付けてないんだ〜。」

「おい、俺の話物の見事に無視つてるだろ、」

「まあ、片付けるのはあしたでいいじゃない、」飯食べよ。私作つてあげる。」

「こいつ話聞かない気だな、」

「ん？何か言った？一樹、「

「ん、いやいいよ、もうこことよ。」

「じゃあ台所備じるね〜」

あ〜もう、せつかく今日中に荷物片付けよつと思つてたのに・・・・・・・・・

こりや無理っぽいな。
はあ〜〜〜。

Dream・8「夕食時の一幕」

「「「いただきま～す！～！」
「せっ、食べてみて、」

テーブルの上には優華が自分の部屋から持つて来た食材で作った夕ご飯がある。

一人暮らしをしているだけあってテーブルの上に並べてある料理はどれも見た目はキレイだ。
でも、問題は味だな・・・・・・・・・。

「さて、まずは一口毒見を・・・・・・。」

「毒見つて何よ！～」

「冗談だよ、冗談。いただきま～す。」

うん、味も抜群だ。
こりゃうまいな、

「うん、うまいな、」

「ほんとに！～」

「ああ、うまい。」

「やつた！～さすがは一樹。」

「じゃあ、私たちも貰いましょうつか？智也」
「そうしようつか、美空」

「「「いただきま～す。」」
「ちよつとまつた～！～！」

「一樹君、急に大声出すと驚くじゃないか」

「あつ、スマセン智也さん」

「うん、それで良し、」

「じゃあ静かに言わしてもらいますけど何勝手に人の部屋入つてる
ソニカ、

一〇六

卷之二十一

「ん、ああ河で来たかつて？」

「そうです。今はそこが話の本題です。」

「優華ちゃんに夕食どうですか?つて誘われたから来たんだ、ね、

卷之三

子江村 畜也 僧華在山 手得あにかの子江

い六
さくまに性林
ひしの山中口のりとに性林
さくまに性林

〔文部省圖書監修會編集〕

「アリス、お前が何をやるかわからん。」

二四二

「あた？ あんなの？ 私がやつらの母ちゃん…………」

「じゃあ優華ちゃん、結婚式にはよんでもね！！」

「もちろんです！！美空さん」

卷之三

井さん。

その間はひたすらメシをくつている智也さん。

そんなに急いで食べるとノド詰まりますよ、って言つてるわばからあ～あ。

גַּעֲמָה וְעַמְּדָה בְּבִנְיָמִן

「だ、大丈夫ですか？智也さんつつーー！」

「一樹君、み、水を・・・・・。」

「は、はい。水ですね。」

俺は田所に行く急いで水をくんでくる

脅威の集中力だ！！

「はいっ、智也さん水です！－！びつぞー！」

「あ、ありがとう。」

そういうと智也さんは水をさつきの「」飯より早く飲み干す。

「」

「大丈夫でしたか？」

いや、死にかけた

「そんなんですか？」

「そういうもんなんのさ、とにかくで一樹君？学校はどうだつた？」

そう言つて優華を小さく指でさす。

「最悪つて何よーー！」

最悪といつ言葉に反応したのか?、指をさしたのが見えたのか?どちらに来れる。

「だつて俺優華のせいで昼飯が食い損なつたし、午後の授業も受けられなかつたかじやん、」

「昼のアレは・・・、なんて言つかなあ～？ん～アレだよ、うん！」

「なんだよ、いつたい」

「不可抗力つてヤツかなあ、あははははははは」

「笑い事か！－転校初日から授業出れなかつたじやねーかよ、」

「大丈夫、その事は私とおねーちゃんどで言い訳しといたから、」

「お前とねーさんほどこの世に怖いものは居ないからな・・・、

「ナイスなボヤキだ、一樹君」

「智也さん今は少し静かにしといてもらえますか？」

「はあ～い、」

「ちなみに何て言つたんだ？」

「聞きたい？」

「いや、聞きたくないけど聞かなきやいけない気がする、」

「じゃあ聞く？」

「じゃあ一応、」

「一樹は私の美貌に酔つてしまつて職員室で寝てます。つて言つておいたよ、」

「一樹君よりもっとナイスな優華ちやん、」

「智也さん、お願ひだから黙つてて、」

「はあ～い」

「つていうのは[冗談よ、ちゃんと気分が悪くなつたらしき]ので保健室で寝てますつて言つていたよ」

「正確にはお前の”蹴り”でだけどな、」

「もあ～、昔の事をグチグチ言つ男は寒いよつつーー、」

「一樹君？そんなに痛かったのかい？」

「カナリイタイデスネ、”臨死体験”ツテヤツカナ、」

「それは苦労したね、美空はそんな事ないから・・・・・・・・、

たぶん

「何か思ひ過たる節でも？」

「いや、思ひ過ごしちゃう。」

「なんか色々あるんですね。」

「いやいや、一樹枯れませんよ。」

「俺達苦労しますね。」

「わうなるみたいだな。」

やつこつて智也とさは苦笑した。

Dream・9 「夕食後の一幕」

「 「 「 「 「チソウサマテシタ～！～」 「 「 「

「おいしかったね、美空」

「智也もこれ位まで料理の腕を上げてもらわないとね、」

「へえ～智也さんって料理作るんですね、」

「そうだよ、美空がねまったく駄目なもんだから、」

「まったく駄目じゃ無いわよっつ～！」

「あはははは、俺の家族と同じですね、」

「一樹君の家族は誰も作らないのかい？」

「はい、オヤジもにーさんもねーさんも誰も作りひとつしないから、自分が作らないと死活問題になるつていうか、まあそんな感じです、

「一樹君も苦労してるんだねえ～、」

「でも一樹、今度からは私が作るからゆづくりしててね、」

「いや、それは遠慮する、」

「なんどよつつ～！」

「だつて、、、、」

プルルルルル、プルルルルル、プルルルルル

「あつ電話だ、私でるね、」

「おいっ、人の家の電話に勝手にでるなよ、、、、」

「いいじやん、いいじやん。もしもし？大沢ですか？？」

「あつ、マジで出ちひやつた、、、、、」

「あつ、なんだ美希じやない、なに？」

「美希って誰だよ？知つてます？智也さん？」

「僕が知るわけないじゃないか、一樹君」

「あ～、やっぱそうですよねえ～」

「あ～うん、分かつた～伝えとく～。それにしても美希もわざわざ大変ね、旦那はどうしたってのよ？」

「あ～、会話が聞けば聞くほどわかんねえ。」

「ここは気にせずビールでも飲んで、さつ、さ

「あ～、有り難うゴザイマス、智也さんって飲めるかああああああああああ！」

「お～、一樹君。一人でツツコミかい？」

優雅な事を言いながら缶ビールのフタを開ける智也さん。

「えっ、何？叫び声が聞こえた？あ～、気にしないで美希。こっちの事だから。」

以前正体不明なヒンクニオウコと交信をしている優華。

「はい、美空。」

「ありがと、智也。んじや」

「カンパイ！」

いつの間にか一人で宴会状態の智也さんと美空さん。

現在の状況。。。。

宴会状態の（バ？）カップル・・・一組。
長電話中の女の子・・・・・・一名。

結論

……………！」いつ俺の家だよね？？

「はあ、落ち着くまで部屋の整理でもしようとあ、、、」

俺が家の主のはずなのになぜかいろんな人に占領中な新しき我が家。初日からこんなでこれからどうなっちゃうんだろ・・・・・・・・。

・・・・・まあ、考えてもしようがないか、、、

「せつ 部屋の整理、整理い～～

俺は即興で作った変な歌を歌いながら部屋に残る引越しの荷物へと勝負を挑むのだった・・・。

47

「それじゃあ、オヤスミ～美希。明日学校で～

「えらい話してましたね、優華さんよ、、、」

「えつ？ そうだった？ 10分くらいじゃない？？

「んなわけねーだろ、オイ」

すかさず突っ込むが本人は何も無かつたという感じで智也さん達が食べ散らかした食器のあとがたづけを始めている。

一時間オーバーの電話を10分程度と勘違いする優華の感覚がすごいよ。ホントに。

てか俺、こんなこと突っ込んでる場合じゃないだろーー！

確かもつと大事な？ことが……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………あつそつそりー！

「なあ、優華なんでおまえ宛の電話が俺の家にかかるて来るんだ？」

？」

「えっ、ああ。アレね。あの電話一樹にだよ〜」「

「俺に電話掛けてくるやつはオメーくらいだよ、」

「それは褒め言葉かなあ？？」

「どこを取ればだよ、でなんだつたんだあ？」

「クラスの伝言だよ、委員長さんからあ、一樹ホームルームでてないでしょ？だからその連絡。」

「出れなかつたのは誰のせいだよ、一体さあ〜」

俺は優華を嫌味な目で睨んでみたが優華は苦笑いしながら床に寝転がっていた智也さんと美空さんを玄関から外に投げでしていた。
つていいのかよつつ！！仮にも人間だぞ！！

おつと失言、失言（笑）

「だつ誰のせいだろうねえ、委員長さんも大変だなあ、、、ははは
ははははあ」

「優華、今のアレでいいのか？？」

「いいんじやないの？仮にもあの一人も人間ですから氣づけば勝手
に戻るつて〜」

「まあ、それならいいけどさあ〜」

「でしょ？？じや、また明日迎えにくるねえ〜」

やつらつと優華は玄関と逆の方向に歩き出した。

「エリ、行くんだ？ 優華？」

「どうして帰るんだよ？」

「そつちはベランダだぞ？」

「あつ、言つの忘れてたけど繋げちゃったからベランダで、

「はあ？？」

それを聞いてベランダに急いで行つてみると、

「ない、板がない……」

マンションにお住みの読者にはわかると思つがベランダで隣の家との境目であるあの板がぽつかりないので。

「夜中に襲いにこないでね

「行くかあああーー！」

「それじゃ、おやすみ

「

そう言つと優華は自分の部屋に戻つていった。

「なんでもうなってるんだ……？」

俺は板のなくなつたベランダと荷物がまだ少し残る部屋を交互に見つめてため息をついた……。

Dream -10「朝のトキメク」

「ん、むにゃ？ 朝だ、」

体を起すのがなんとなくめんどくせこので顔だけを上げて昨夜にセツトした時計を見る。

「ウム、今日も時間どつだな。」

窓を開けるともう秋と実感させるような風が部屋の中に入ってくる。さすがに六階だけあって風は強い。

「寒つつ……マジで寒い。」

俺は開け放った窓をそそぐと閉めた。

・・・・・え？ 何？
秋だなんて聞いてない？？

そりゃ言つてしませんからね。（笑）

・・・こんな時期に転校なんてない？？

まあ、大人の事情つてことによろしくー！

・・・・・いい加減？？作者にビリードヤー！！

さてそろそろ起きないと遅刻だな、
さて朝食でも食うかああ

その思考を最後に俺はベッドから立ち上がり、廊下の扉を開けようと
した時マジに思考が止まつた。

最後に見たのは勝手に開く部屋のドア。

そして最後に聞こえたのは知り合つたばかりの少女の声・・・・・。

バンコクっつー！

そう言ひ放つと俺の意識は吹き飛んだ。

六六六六六

「腰、
いてえ～～～」

「気にしない、気にしない、だから冗談で言っているじゃん」

誰がこの坂つだれか?

説明していないのに状況が呑み込めるあなたはかなりすごい。つてか超能力者だ。どつかのテレビ局にその才能を売り込んできてほしいものだ。

さて、俺はいま一階にあるじーちゃんの喫茶店「レインボー」で朝

食中だ。

皆さんもわかるように部屋を出ようととしたその刹那何処からともなく俺の家に侵入していた優華の飛び蹴りによるなんとも強引としか思えないドアの開け方に俺のほうは天国のドアを開けかけてしまった。

30分ほどの気絶の後、俺の気絶を起すでもなくずーっと眺めていた優華を強制排除し着替えと用意を手早く済ませまだかたづけが済んでいない荷物を見て見ぬふりをして通り過ぎこうして一階で朝メシに到達したという所存である。

「ははっ、一樹君も朝から災難だつたねえ。」

「智也さん笑い事じやないですよ、」

「ははっ、『ごめん』『メン』、でもたまにはいいじやないか、、、」

「たまつて、俺昨日来たばつかなんですけど??」

「あれ?? そうだつたつけかなああ」

「ふあい、ふおれふえやふおふいふおつふおふあふあふいふえふあふえふふあふあ」

「一樹、食べながら喋らないで、」

「しようがないだろ、急いでるんだから、、、」

「それでも良くなんで食べましょうね、一樹」

「・・・・・・・急がせる原因作つたのは誰だよつつ、まつた

く

「あはは、それ言われるときつになあー、おねーちゃん・・・・・・

「いつからおまえは俺のねーさんになつたんだ??」

「その場のノリじやないつつ、気にしないの!!」

「わかつてるよ、ねーさんが一人いたら堪つたもんじやないからな。

。。

「そーよねえー、私一樹と姉と弟の関係なんてやだしさあー

「その発言は何か怖いな、」

「いいじゃない、いいじゃない。」

「ところで一人とも邪魔しちゃ悪いんだがちょっと良いかい??」「邪魔だと思ったんなら入ってこないでください」

「でもあれ・・・」

そつと智也さんは顔だけを動かして視線を壁に向ける。

「あれって・・・・?」

つられて俺達が智也さんの視線を追うと・・・

そう、智也さんが見ていたのは壁ではなかつた、正確には壁にかかつた時計だつたのだ。

「うああああああ、遅刻!!」

「ね、言つたほうが良かつたでしょ?」

珈琲をなんともいえない大人の雰囲気をかもし出しながら飲む智也さんに礼を告げると一目散に「れいんぼー」を出て俺より先にこの家の住人となつていたマウンテンバイクを引っ張り出すと学校に向つてこぎ始めた・・・けど、

「うう、重つ」

「何よつつ!...可憐な乙女に対しても言葉は無いんじゃないの?」

「何でおまえが乗つてんだよつ」

「何よ、私だつて遅刻の瀬戸際なのよ、乗せてきなさい!...」

重いと思えば案の定優華が俺の自転車の後ろに器用に乗つてゐるではないか・・・・・。

ここから学校までは確かに登り坂だつたはずでは・・・・・・

。

「なあ、俺に拒否権は？？」

「無い。もちろん。」

「やつぱり？？」

「も～、男なら文句言わないでちやつちやと「さきなさこいつ…」

しうがない、これ以上言ひ合ひしていくも遅れるだけだな。
俺は仕方なしに優華を乗せて学校に向けて出発した。

頑張れ、一樹。負けるな、一樹。

学校に着いた暁には栄光が待っている！（なんのだよつづつ…）

と一人で心の中でぼやきに突っ込みで返してみるのだった。

あつ、ちなみに良い子のみんなは自転車で一人乗りなんてしちゃいかんぞ…！

Dream -11「学校にて学園祭…かも？」

「はあ、はあ、はあ、ああ～もう疲れたつづつ…！」

「ハイハイ、ご苦労様。」

「よくもまあオレの苦労をそんなに簡単に…！」

「ハイハイ、文句は跡で聞くからあ～、早くしないと遅れちゃうよ

♪

「おい、ちょっと待てよ…！」

そう言い残すと優華はダッシュで校舎の中に走っていった。

俺も急いで自転車止めて教室行かなきゃヤバイぞ、、、

* * * * *

「はあ、はあ、はあ、ああ～もう疲れたつづつ…！」

「一樹、転校した次の日から遅刻か？」

「遅刻じゃねーよ、セーフだろーー！」

「ギリギリな、」

「うひ、痛いとこをつくんなよな、、、」

その後俺は自転車置き場につくなり適当に自転車を放り投げるとダッシュで教室に向かつて走り、滑り込みでベルの鳴り終わる直前に教室に飛び込んだ。

ちつ、優華が朝蹴りを入れてこなけりや こんな日には…

そして俺を蹴り飛ばした張本人は自分の席で昨日のあ～、朝倉だ、とかと余裕で喋つてやがるし。

「よつ！…和真、おはよーさん。それに転校生も…！」

「委員長、おはよーさん

「委員長？？」

「お、そういうえば転校生 Do you remember me?」

「………… Wh、なぜ？、どうしてこの英語が出てくる？

俺も何でか第一声が英語になっちゃったじゃねーか。

”どうーゆーりめんばーみー？”だと？

覚えますか？覚えてるわけねーだろ、まだ引っ越して三日も経つねーよ。

てかこの小説11話まで来たのにまだ三日も経つてねーのかよっつ！！

おい作者、時間の進み具合が遅くないか？まあ俺は全然かまわないのだが・・・・・。

つて俺はいつたい何を言つてているんだ？？？

どうなつてんだよ、なんかわけわからなくなつてきたぞ・・・。

ああ～、まあなんか返事はしといた方がいいよな、、、
え～っと・・・・、

「はあ？？」

10行も使って考え続けたにもかかわらず、のどの奥から出て来たのはそんな間抜けな声だった。

「気にするな転校生、俺は委員長こと柏倉 悠介よろしくな

そう言つと委員長」と柏倉 悠介は俺に向かつて深々とお辞儀をした。

ん、外見は失礼だが、委員長にはとてもなれそうではないのだが、顔はとても眼鏡がキマついてまさに委員長といったキャラだな。

「…………委員長。俺は……」

血口紹介をしようつと思つていた俺は委員長の次の一声で遮られた、

「聞くまでもない、大沢一樹、」

「やっぱり委員長たるもの、転校生の名前は知つてゐるが、」

「いや、そうじやないさ」

「やっぱり委員長とかには転校生の情報は先に回るもんっつ……て違うのか?!」

「蒼井が言つてた通りだな、覚えてないのか……」

そう言つた委員長は少し悲しそうな目をしていたんだと思つ、でも俺にはその色を読み取れるほどの冷静さは少しも残つてはいなかつた……。

「も、もしかして委員長も俺をしつてるのか?だからわざあんな事言つたんだな、」

「知つてるかもなにも昔は良く……つてもせんなんことも無いが、まあ世話になつたんだがなあ」

「そつなのか、すまんな。優華から聞いてると思つが覚えてないんだな、これがよ」

「いや、きにするな。昔の事なんぞ、覚えてない奴の方が大勢さ、」

「すまん……」

「だから気にしなさんなつて、……」

そんな重たい雰囲気が流れる中俺はあることに気づいた……。

「あれ？ 和真、 なんでお前今日鞄持つてきてないんだ？」

「いま、 なんとなく委員長の顔を見ることができなくて回りに視線をそらして気がついた。

和真みたいにまったく持つてきていらない奴や、 いつもより格段に軽装備な奴とか、 とにかく格段にみんなの様子が違う。

「なんでって今日から学園祭の準備期間だろ、 お前、 昨日昼に蒼井に氣絶させられてHRに出れなかつただろ、 だから委員長に連絡頼んだんだけど・・・・・・？」

「聞いてない・・・・・・」

ジト目で委員長を睨む。

俺はそんな事知らないから昨日優華に渡されたこのクラスの時間割を見ていいつも通りのおもたあい鞄とおもたあい優華（この部分は口に出したら確実に殺されるな（苦笑））を自転車に乗せてあの以外と地獄な坂を登つて来たんだもんまああ、

そんな今更今日は軽装備で良いですよと言われてもねえええ？
怒っちゃいますよ？ 委員長？

と言ひ意味を込めて笑顔で睨みつける・・・。

「おっ、 俺だつて、 昨日は忙しかつたから美希に頼んだはずなんだよ・・・・・・、 なあ、

美希ちよつとーー！」

そつとつて委員長が大声で呼んだのは優華や、 朝倉とかと話していたもう一人の女子だつた、 、 、 。
でも、 待てよ・・・・・・・・・・・・。 美希？

どつかで？？

いや？どこだ？どこかで聞いたんだが・・・。
う～む、思いだせんぞ・・・・・・・。

セツヒンじてゐる内に美希と呼ばれた子が優華たちといひ合ひに来た。

「呼びましたか？悠介？」

「なあ美希、昨日一樹の家に電話して伝えてくれたよな？？」

「えつ、ええ。確かに大沢君の家に電話したら・・・・セツヒンいえば
優華がしましたわよね？」

「ああ、あの時一樹の家に居たのよ～」

「あら～～そうでしたの？」

「ああ～～あれか～～昨日の夜の優華の長電話～～

どつかで聞いたと思つたらそれがああ。あ～、すつきりした。

「何で優華が大沢君の家の電話に出んのよ、～、～」

おお～～いい所突いたな朝倉～～あんたこ～らの人間と違つて常識
あるねえええ。

「え？だつて一緒に住んでるし、当然でしょ？？」

「あつ、そ～なんだ、知らなかつたあ

おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい！～そこ納得すん
なよ！～

つてか一緒に住んでない！～

優華も嘘言つなつての！～

「それで、蒼井と喋つて伝言忘れちまたのか

「ああ、そう言えば云々も頼まれていた気がしますわね、まあ良いじゃないですの、悠介」

「まあ、まあ忘れたからってどうって事ないんだから気にしなくて良いわよ、美希」

「そうですわね、蒼依の言つ通りですわね」

「ああ、そういうえば今日から本格的な準備だね、委員長頼むよ」

「まあ、適度に任せとけ、蒼井」

「おっ、委員長今年もやっぱあるのかい？」

「ある？何があるんだ？和真は何いってるんだ？？」

「そういうえば俺学園祭此処のクラス何やるのか聞いてないぞ。」

「なあ、此処のクラスって何するんだ？」

「あれ？一樹？私言つて無かつたつけ？」

「聞いてないぞ」

「あら？優華も忘れっぽいですね」

「此処は、女子で喫茶店。男子でゲーセンをするんだよ」

「おお……ですが委員長。簡潔すぎる説明……すばらしいですなあ

ああ」

「ありがとう、和真君。君は良き（？）理解者だ……」

「へえ～そつなんだ、知らなかつた」

「おい一樹、普通に感心してないで俺らに何か突っ込んでくれよ」

「ああ、すまん和真。お前らが馬鹿らしくて寒心してたんだよ」

「…………」

なんだ！――」の沈黙は。

ヤバイぞ！――

カナリヤバイぞ！――

「おっ、そろそろベルが鳴るぞ、みんな席に着こなせ――。」

「そうね、馬鹿な和真にしては良い事言ひじゃない」

「では、行きましょうか？悠介」

「・・・・・おっ、おう」

「じめん一樹、フォローできなによ」

一同は口々に別れの一言を告げると早足で自分たちの席に戻つて行つた。

中でも一番キツかったのは、和真の

「・・・・・・・・・・」愁傷様

と並んでじが俺の不幸を楽しんでいるらしい和真の笑顔だった。

D r e a m 1 1 ~ E N D ~

Dream -12 「学園祭準備期間？！ Part？」

「ええ～、これから学園祭に関するホームページをしたいとおもう
まあ～す」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチ
「よつしゃああああああああああ！」

「良いぞーーー！委員長！！」

「いよいよ来たぞおおおーーー！学園祭だああーーー！」

委員長の気の抜けた声にも関わらずクラスのメンバーはハイテンションだ。

俺はてつきり委員長は悠介一人と思いきやさつき委員長に呼ばれて了美希つて子も一緒に教壇の上でやっていた。

「え～今年の文化祭は例年通り妨害工作など激しいバトルが繰り広げられると予想されます。だから皆気を付けろよお～」

バトル？！

学園祭の準備で激しいバトルが繰り広げられるってどんな学校だつ
つっ！！

と口に出して委員長に多いに突つ込みたかったがそんな勇氣も無かつたので心のなかで叫ぶ。

そんな俺の心の葛藤をよそに委員長コンビは淡々と事務的な口調で説明を続けている。

「今年はこの校舎が全生徒たちの作品展示に使われますので、私たちはこの校舎を使えませんわ、ですので一年生は旧校舎B棟301と302を使うことになりましたわ」

「だからこれからの一週間は登校したら旧校舎のまつに直接向かうことへ、わかつたか？みんな？」

「ほおーい

「了解～、委員長」

などと皆が勝手な事を言つてゐる間に……。

”旧校舎B棟301と302” ついでに？？

今日だつていの教室にたどり着くのに優華に道を何回聞いたことか・・・。

つて事で前の和真に当然質問。

「なあ、和真？旧校舎B棟301と302つじやない？

「ああ、あそ！」辽だよ、」

と言つて和真が指差したのは委員長達が喋つてる所の少し右横・・・。

・委員長達は真ん中で喋つてるるので黒板の端の方だ・・・。

「何処だよ、黒板じやん」

「甘こな、甘すきな。田をよく凝らして見てみる」

そう言われてもう一度黒板を良く見てみる・・・。

が、いくら見ても黒板には”勝つぞ！“の一言のみが書かれてい
てそれ以外の文字や地図らしき物は見当たらない、
てか、学園祭のミーティングなのに”勝つぞ！“はないんじやな
いのか？体育祭なら分かるけど、

「だから、何処に書いてあるんだよ？」

「書いてある？何を言つているのだねー樹くん、黒板をよおしく見
たまえ、黒板や壁が透けてその向いの旧校舎が見えてくるだろ
う？」

「ああ、つまりこのアホはこの校舎を出て黒板の方向に旧校舎がある
って事を言つ
のにこんなに遠回しな発言をしやがったのか・・・
はあ、このアホはっつー！」

「そんな説明でわかるかああああああーー！」

全力で和真の頭に拳を入れた俺は、いつの間にか我を忘れて席から立ち上がりてクラス全員の注目を集めていた。

「大沢君、私達の説明に何か不満でもあるのかしら？」

「まあ、そうつづかかるなよ、美希。一樹だつてまだ良く分からな
いに決まってるんだからー」

「ま、まあそうですわね・・・。とりあえず座つていただけません
かしら？」

「ああ・・・すまん、ついテンションが上っちゃって・・・」

クラス中の注目を集め恥ずかしかったのでとりあえず言い分けを言
つておく・・・。

「転校生も転校早々このテンションについてこれるとは分かるやつ

だなあーー！」

「いいぞーーー！大沢ああーー！」

「最高だあああーー！」

クラスメイトは口々に「こんな言葉を言い、何とか俺がテンションが上ってしまった・・・。

「お前のせいで恥搔いただろ」

「まあ、人の頭殴ったんだからそれくらいの代償はねえ？」

「元はといえばお前が悪いんだろ？お前が？」

そう言いながら俺は和真の肩を全力でひねり潰してやつた。

「いえででつででででえで、 いえつで

「まあ、これも自分の罪の重さと思って実感しな」

俺が何罪罪をおおおいでででで、すみませんでしたあああああ

シラバツくれようとした和真の肩をせりてひねり潰してやると面白く、いよいよ悲鳴を上げた。

「ただがよつと面白く説明してやつただけじゃんかよ」「面白くない、ちゃんと黒板の方向つて言えーー。」「ああ、ちなみに旧校舎は正反対だよ」「へへ、つまり嘘かあああ

「うん、嘘（満面の笑み）

そのとき俺の中で何かがはじけた？様な気がした。

「だからなんの覚悟ですか？大沢君」

「あっ、いや、和真に向かつて言ひたんだよ……ははははは」

気付くとまたまた立ち上がりて和真に拳をいれる寸前で止まつてい
た・・・・

「一樹、俺らが一生懸命説明してるんだから聞いてくれよお～」「
す、すまん。ちゃんと聞いてたよ、ちょっと和真がくだらねえ事
を言つてきたもんだから・・・・」

「悠介、なんか段々ムカついてきましたわ」

「美希も落ち着いて、ほらシワ増えるよ～」

「悠介もなんかムカつきますわね」

「ほら、シワふえちゃうよ～」

「悠介も覚悟はよろしいかしら?」

そつと美希つて子は委員長の襟を引っ張つて教室の外に連れて
行つた。

その後にすぐ何か恐ろしそうな音が聞こえたんだけど、うまく俺
にはここに著す事ができない。それにたぶんクラス全員が聞こえて
なかつた（事にしたかったと）思う。
それほど恐ろしい音が聞こえていたんだと思つ。

後で委員長に聞いてみようと思ったが、まあその話はまた後で。

「随わん、お待たせしてすみませんでしたわね、続きを始めましょ
うか」

数分して戻ってきた委員長は何か疲れきつた表情で端に居る先生の
隣に座り込んでしまつた。

まるで慰められてるみたいだな。

ん?・・・・・・つて先生居たんだ!!

存在感薄いよ！！、それでいいのか先生！！

「では説明は以上ですわ。ですが一つ連絡事項が先生からありますので最後にもう少しだけ集中していただけますこと？」では、先生手短にお願いいたしますわ」

つて、ちょと説明終わったのか？和真とか先生の存在感のなさに気を取られて全く聞いてなかつたぞ。
何すりやいいのか全くわからねえ。
まあ、後で和真にでも聞くか。

「皆準備に気合いを入れるのは實に結構、結構なんだが・・・。
この間の休み明けテストに赤点を取つた者は準備期間を返上して補習を受けてもらひ事となつた。赤点など取る奴は居ないと先生は思つてたんだよなあ、職員室でも「私のクラスは大丈夫です」って言つちやつたのにさあ結果を見てみりやさあこのクラス赤点ランキング結構下なんだよねえまあ赤点の自覚がある奴は覚悟しとけつつ！今から名前を呼ぶからなつづつ！呼ばれた奴は学園祭なんて楽しめないと思えよつづつ木村、寺谷、中本、植村、わかつたか！…その四人だ！」

「俺があーー、やつぱあ？」

「まあ、わかつていたがな

「まあ、補習も悪くないかあ

「そつそつ、慣れれば楽しいしね、はははは

名前を呼ばれた木村と寺谷と中本と植村と思われる四人の生徒はそれぞれ勝手な意見を述べている。
まあ、誰が誰だかまだよく分からぬから喋つてる四人のうちどれ

が木村でどれが寺谷でどれが中本でどれが植村なのかはわからぬえ
けどな。

「はあ、はあ、コイツ等は少しほ反省でもしてくれよ、先生の立場がさあ……」

「ああ、先生が落ち込んでらっしゃる、しかも息まで切らして……。あれだけ一気にまくしたてたらまあ、いきもまれるでしょうな、ウム。

先生はすこし疲れきった表情で端に面する委員長の隣に戻つて行つた。
あ～あ、今度は逆に慰められてるみたいだな。
なんかちょっと面白い図かもしれない。

「でわみなさん、各自持ち場について準備を始めてください……！」

その命令を合図にして一斉にみんなが持ち場に向かって解散して行つた。

さあ～て、俺も頑張りますかあ～

・・・・・・・・ところで俺何したらいいの？

まあ、行けば分かる・・・・・・・・か？

Dream12～END～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5873a/>

Eternal + dream.

2011年1月18日15時23分発行